

「学生のための大学？」

森 元孝 wienmoto@mn.waseda.ac.jp

今年の春闘は、ベア0.2%で妥結することになった。春闘では賃金部分がシンボリックな意味をもって、その多少だけに光があてられる傾向があるが、教職員組合が提出した統一要求書には、無論、それ以外の多くのことが挙げられていた。

私は教員であるが、ここ数年のきわめて数奇な経験から、職員組合から出された次の点について、理事会は待たなしに、要求を受け入れて欲しいと思う。それは、「警手」の定年延長・再雇用についての要求である。「警手」は、定年60歳とされており、新規採用を行っていない状態が続いている。多くの警手が定年の年齢に近づき、また今年すでに退職された方も少なくない。大学・理事会の方針は、おそらくは定年退職により自然減員を待ち、その後、外部業者に業務を委託しようということなのであろう。それによりコストの削減がどれほどのものであるかについては知らないが、そうした計算をすることができるのは、警手の仕事、現場を十分に知らないゆえにのように思う。

大学は、本部棟にいる理事者たちだけが担っているのではない。学生はもちろん、教員も、職員もその担い手であり、警手は、職員である。その機能を、「警備員」や「ガードマン」と同等だと考えたとしたら、大学の現場のみならず、大学というものをよくわかっていないことを明言しているに等しい。

教員は多く教室で学生と接する。事務職員は事務所で学生と接する。しかしながら、学生は教室で学ぶだけ、事務所で事務手続きをするだけではない。課外活動をはじめ、さまざまな活動をつうじて、大学と関係している。このきわめて多様な内容を備えたインターフェースの役割をしているのが警手である。

警手詰め所から窓越しに、あるいは放置自転車をかたづけながら、あるいは風で倒れかかった看板を改めて立て直しながら、出入りする学生に目を向けて、ある時には相談にのり、ある時には「そんなところに自転車を止めてはいけません」「文学部キャンパスでは拡声器は自粛してもらっています」などの、ごく些細な出来事への対応から、重大な出来事に至る可能性のある事態の初期段階における適切な対応をするという重要な仕事を担っているのが警手さんである。

豪華な本部棟のデスクを前に上等の椅子にすわっている理事者たちには想像もつかないであろうが、きわめて多様な経験の蓄積の必要な仕事なのである。その意味では、教員が70歳定年であるのなら、それとの差を説明する言葉はありえない。60歳定年というのは、きわめて問題である。

とくに、総長は新聞等でも、これからは「教員のための大学ではなく、学生のための大学」だと発言しており、来年竣工予定の新学生会館もそのためのもののはずである。新学生会館の管理方式をどのように考えているのか、詳細を私は知らないが、警手さんと彼らの経験と知恵が何よりも必要なはずである。

96年から98年まで第一文学部の学生担当教務主任をつとめたが、そのときにも、警手さんには、あらゆる場面で助けられ、またさまざまなことを教えていただいた。98年5月、文学部構内の長く一方的に占有され学外者の居場所にもされ続けてきた「ミルクホール」正常化を実行した時にも、勇気を出して前面に出た教員たちを見守り続けてくれたのは警手さんたちであった。あらゆる場面で、時宜を得た対応をすることができたのも、警手さんたちのお陰であった。あるいは、また悪質なストーカーにつきまとわれる学生を保護しつつ安全に通学させるために緊急避難場所のひとつとしてお願いしたのも、警手詰め所であった。教員は教室で授業をし、研究室で研究をし、会議室で会議をしている。事務所の職員は、事務所の仕事がある。キャンパスにあふれた学生に、詰め所から目を遣っている警手がいるからこそ、その時々巡回をしてくれている警手がいるからこそ、そうした本務に没頭することが可能なのであり、また緊急な時には、教員や事務所が即座に対応をすることができるのである。

早稲田大学は、まだなお正常化しなければならない黒い過去をひきずっており、私は個人的には、

その解決は遠く、現理事会の能力では、ほとんど難しいのではとさえ思い始めている。新学生会館の開館は、どうしてもこの過去との訣別を意味しなければならないように私は思う、それももしかしたら無理なような気さえしてきている。

今まさに、きわめて微妙かつ複雑なインターフェース機能についての経験と知恵とが必要なはずある。私のように何か事件が発生した時、あるいは役職についた時だけ出張する教員も必要だが、それだけでは駄目である。また、事務所の事務職員だけの対応だけでも駄目である。6月2日の団体交渉において、どういう意味かはよくわからないが、ある常任理事が「戦っているだけでは駄目なんです」と明言したが、まさにそれだけでは駄目である。ただし、「安全なところから」そう言っているだけで戦いもしないのは、さらに駄目である。戦う以外に何をどのようにするか、そしてそれを可能にする条件の整備が必要であり、そのための知恵と経験が必要なのである。

警手の役割の重要性に目をやらないで、ただコストのみで、職員組合の要求に対応するなら、あるいは「検討中」という言葉だけの対応でやり過ごそうとするのなら、私のペシミズムは来年そのまま現実となる。その時の責任は、いったい誰にあるのか、理事者たちはよく考えて欲しい。

問題は、その他の現業部門を担う人たち、清掃員、労務員の場合にも同じである。新しい建物が次々にたてられ、施設が「インテリジェント化」するに依りて、管理経費が増えていくという循環の中に早稲田大学も入り込んでいる。これまでとは異なり、管理部門の外注化が、やはり早稲田大学にも浸透しつつある。

警備会社や、そこで働く人たちをけっして疑うわけではないが、仕事を進める上では、必要箇所のマスターキーが警備会社、管理会社の担当者に託されることになる。清掃作業の場合にも、施錠管理の場合にも、鍵がなければ仕事にならない。学生担当教務主任をしていた時、朝7時前に出勤することも何回もあったが、早朝、清掃作業が進められ、きれいになっていくキャンパスに感心したものである。もちろん、学部をはじめ各部局の事務所内も清掃作業が行われる。研究室にも定期的に清掃が行われる。警備会社、管理会社、すべてユニフォームを着ているというだけで、極めて日常的な光景として写り、私達の記憶に残らないまま、それぞれの作業は進行していく。しかしながら、これには注意しなければならない、ある種の問題が存在している。

コスト削減を理由に、こうした部門を、徹底的に匿名化してもよいものだろうかと思うのである。せめて身元だけは明かな人に就労してもらいたいと思う。かつて早稲田大学は、大学の街の周辺にお住まいの方々から労働力を提供して頂いていた歴史がある。実際、私の知っている警手さん、清掃員の方々は、大学の近くに住んでいる。

清掃しかり労務しかり。早稲田大学がその近隣から提供を受けてきた理由は幾つもあったであろうが、何よりも大学と密接しているところの人々だということに意味があった。総長は、「グローカリゼーション」と称して、早稲田のキャンパスにおける人の出会い、早稲田大学近隣との友好関係の発展に努力しようとしていると言う。そうであれば、是非ともこれまでの歴史を大事にして、清掃作業、労務作業への人材の確保につとめて欲しい。外注する業者と、これまでこれらの部門にかかわってきた職員たちの意見を真摯に聞く必要があるし、そうした現業部門の職員たちに支えられてきた事務職員、教員の意見も聞く必要がある。

誰も名も知らず、顔も知らない警備の専門業者、清掃の専門業者、労務の専門業者に委託して、大学の安全を安心して任せられることができるであろうか。継続課題として、いつまでもそのままにし続けることなく、職員組合の提案を即時に受けることが理事会の責任であり、まさに来年から始まる21世紀も、やはり顔の見える「あなた」の早稲田であり続けるための必須条件である。

2000年夏 教職員組合『きょうとうニュース』の原稿から